



第104号
北海道教育大学
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村
(TEL 0126-45-2300)



〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉

- も ○巻頭言…… 1 ○総会報告…… 2～3 ○令和元年役員…… 3 ○研究大会…… 4
- く ○先輩を訪ねて…… 5 ○学生活動支援事業…… 5 ○恩師と学生のこの頃…… 6
- じ ○新青陵会員の抱負…… 7 ○支部だより…… 8

持続可能な同窓会の創造を目指して

北海道教育大学青陵会 会長 早瀬 公平



平成から令和へとなる
号が変わり、我が国
の様々な事象が新た
な時代を迎えたよう
な賑わいを感じます。言い換えると、
国民の多くは社会の閉塞感を覚え、
何かしら変革を求めているのではな
いでしょうか。

我が同窓会もその一つとして認識
しなければなりません。
教員養成の過剰ということから、
0免(ゼロめん)課程が設置されて十
二年が経過しましたが、最近の国の
動きとして、小学校の教科担任制と
いう構想は、一転、わが母校に教職課
程を復活させてもよいのではという
淡い希望が湧いてきます。岩見沢校
の芸術・スポーツの専門性が学校教
育に果たす役割を再認識していただ
きたいと強く願うものであります。

一方、各地で大学法人の経営統合が
進む様子を見ると、母校の姿が今
後どのように変わっていくのか、全く
不明の状態であることは否めません。
昨年度の総会でご承認をいただき
ました、「同窓会今後の在り方検討委
員会」には、現状認識をもとに、組織

として今後あるべき方向性について、
協議・検討をお願いし、本年度総会
で中間報告をいただきました。ホー
ムページにも掲載しておりますので
是非ご覧になり、ご意見を賜りたい
と思います。

中間報告では、規定にはない賛助
会員とOB会員の解釈について、改
善の必要性を問題提起しています。
本会では、既に、「卒業生は皆同窓
会員」として、会是の改訂とともに
その意義も明らかにしてきましたが、
現実には過去の教員中心の会務運営
の名残を拭うことが出来ないまま今
日に至っています。

また、会費徴収の方法や卒業時の
入会の方法についても、現行の方法
を抜本的に見直す必要性についても
指摘されるなど、一定の方向が示さ
れましたので、今後は具体的な方法
について検討をお願いするとともに、
様々なアイデアを提案していただき
たいと思います。

今年度の研究大会は、この問題に
集中していただき、具体的な改善案
について、シンポジウム形式で公開
討論をして頂くようお願いを致しま

した。

また、各支部にもご検討をお願い
してご意見を賜り、それらを参考に
検討委員会で最終案をまとめていた
だくという手順になっています。

これまでの、教員を中心とした活
動はこの先十年後には維持すること
が困難となることを見据えて、新た
な同窓会活動を創造していかねば
なりません。

会員拡大、名簿作成、研修活動、
広報活動、大学との連携等、具体的
には沢山の課題がありますが、本部
並びに各支部の同窓の仲間と協働し
て、一つ一つの課題を乗り越え、知
恵を出し合い、お互いの親睦と会員
各位の資質向上を目指して、我が青
陵会の存在と価値を高めることによ
り、大きな力を発揮できるものと考
えます。そして、次の世代へ引き継
いでいくことが今に生きる私達の役
割と考えています。

まもなく創立百周年を迎えようと
する我が青陵会において、初めてとい
えるこの難題に、私たちは総力を挙
げて立ち向かわなければなりません。
会員の皆様には、八月のシンポジ
ウムにご参加いただき、貴重なご意
見をいただきたいと思っております。
何卒、よろしくお願いいたします。

令和元年度 北海道教育大学青陵会総会報告

新しい同窓会の在り方を創造する一年に

北海道教育大学青陵会理事長 小関文雄

一、はじめに

今年度の役員改選で理事長を拝命いたしました小関文雄と申します。

伊藤理事長の後任として与えられた使命を全うしたいと考えておりますので、各会員の皆様には一層のご理解・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、令和最初の総会を五月十八日（土）に岩見沢市のホテルサンブラザで各支部代表の参加を得て開催いたしました。

総会に先立ち、教育大学の学長代理である佐川副学長から挨拶があり、



その中で 文部科学省による 外部資金の獲得額に 応じた 交付金増額制度などの説明 と 寄付金のお願

がありました。加えて学生が就学しやすい環境整備を図る「キャンパス活性化リノベーション事業」についてお話がありました。

その後総会が始まり、冒頭に早瀬会長から「令和の時代を迎え、世の中には新たな望みを期待する雰囲気が出ており、我が青陵会においても、今後の変革を求めていく時期に来ていることを感じます。教員を中心とした同窓会からの方向転換も視野に入れて、次の世代に引き継ぐ「同窓会」としてご意見をお聞かせください。」との話がありました

次に、島貫札幌支部事務局長と高岸空知支部事務局次長を議長に選出し、議事が進められました。

二、会務報告

【事務局】

平成三十年度の会務報告並びに大学の研究活動充実への支援や、広報活動の充実など本部の取組の報告を行いました。

特に次の取組を進めたことを説明しました。

- 1 学生生活活動支援資金の提供

- 2 卒業時の幹事会の結成
- 3 教職志望学生への支援
- 4 ホームページの改善

- 5 大学本部、五校同窓会、関係機関等との意見交流

- 6 「同窓会在り方検討委員会」の設置と中間報告

- 7 事務局組織の五部制への再編また、百周年にも触れました。



三、令和元年度の活動計画

【庶務部】

- 1 賛助会員等への会報の送付と賛助会費の徴収

- 2 関係機関への年賀の挨拶業務
- 3 同窓会加入の取組
- 4 総会及び各種会議の準備など

【研修部】

- 1 研究大会の実施（今後の同窓会の在り方について公開討論）

- 2 各支部への講師派遣など

【会員・組織部】

- 1 同窓会名簿の作成
- 2 他業種・現職外の同窓生のデータ収集など

【広報・情報発信部】

- 1 「道青陵」の発行
- 2 ホームページ等による情報発信など

【大学連携部】

- 1 母校の活動支援と情報発信
- 2 新規卒業生の同窓会加入促進

【会計部】

- 1 財政基盤の強化と予算の有効的な執行また、新課程開設十周年や開学百周年に向けた寄付口座の開設



四、教育行政との連携強化

現在、本庁をはじめ各教育局、市町村教育委員会等で同窓の指導主事等が活躍しており、同窓会活動への支援をいただいておりますが、引き続き各支部との連携の下、優秀な人材の輩出を目指した取組を積極的に進めてまいりたいと考えておりますので、各支部におかれましては情報提供や人材発掘をお願いいたします。「親睦と資質の向上」に会是が改められてから十一年が経過する中、各支部等においてはその実現に向けた様々な取組が進められていると思いますが、今年度は早瀬会長の下、各支部との一層の連携を図りながら、業務の推進に当たってまいりますので、ご支援をよろしくお願い致します。



令和元年度 北海道教育大学青陵会 支部長・事務局長一覧

公費・民間	社教主事	指導主事	高特大	関東	オホーツク	根室	釧路	帯広・十勝	日高	胆振	空知	渡島	檜山	留萌	宗谷	上川	小樽	後志	石狩	札幌	支部名
松浦靖高	川森功偉	眞田眞	黒田治	岡山武	高田新一	滝泰英	志藤英樹	大熊孝史	品田和輝	大年智二	畠山和彦	浅野友善	草間留美子	金山茂樹	小島康秀	鈴木伸行	宮澤知	山本康博	菅原聡	磯島年成	支部長
佐藤直輝	川森功偉	瀬越義範	宮崎純也	御法川慎司	清水洋人	滝泰英	志藤英樹	上坂寛	玉手広昭	真鍋忍	宮本千裕	浅野友善	草間留美子	豊崎東洋	山本民	倉本格克	及川年彦	中川真人	安保幸司	島貫修	事務局長

令和元年度 北海道教育大学青陵会役員

副理事長	理事長																副会長	会長	参 顧 員	名譽顧問									
米本智(ゆづり小)	小関文雄(岩・清園中)	石原学(指導・社教)	黒田治(高特大)	小田良秀(五区)	佐竹秀行(四区)	浅野善三(三区)	本間正彦(二区)	巻敏弘(一区)	和田洋人(石狩)	猪狩秀一(札幌)	畠山和彦(空知)	近田勝信	網淵秀幸	石塚信彦	早瀬公平	東志昇	高木勇一	高島康範	荒川巖	佐藤惠三	根津孝	安孫子章平	大森啓司	今井信義	藤原光成	笠井瑞昭	葛西明		
			監査		副部長	大学連携部長		広報部長	副部長	広報情報部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	副部長	
			成田秀彦(空知)	品田和輝(四区)	谷本慎司(一区)	小林大助(岩・東少)	堀文彦(長沼舞鶴少)	正博和(沼・沼田少)	高羅正次(滝・東少)	沢泰宏(岩・第一少)	小野寺英樹(美・峰延少)	一ノ瀬健太郎(赤・赤平中)	江幡佳代(三・岡山少)	松田直一(美・中央少)	渡邊孝仁(砂・中央少)	的場孝道(長沼舞鶴少)	松縄義道(長沼舞鶴少)	山下正志(美・峰延少)	長崎卓也(北長沼少)	三浦新一郎(栗・継立少)	小熊孝一(秩父別中)	井村信岩(豊中)	曾根秀彰(岩・清園中)	林宏和(岩・北村少)	米倉卓司(沼・沼田中)	庶務部長 織田靖雄(歌志内少)	尾見秀樹(岩・美園少)	納口卓(栗・栗山中)	八柳圭(北長沼少)

第四十六回 北海道教育大学青陵会研究大会

「シンポジウム&バズセッション」

「持続可能な同窓会の在り方を求めて」

本年度の研究大会は、これからの青陵会の在り方について、様々な視点から意見交流をし、最後は参加者全員が小グループに別れ、意見交流しました。

【基調報告】

「同窓会在り方検討委員会」の石塚信彦会長から、中間報告が説明されました。

現状は、教員が現職会員として同窓会の中核を成しており、卒業生全てが会員となるためには組織をスリム化して機能させていくことが求められている。その中で、今後も組織全



体の在り方や活動内容の見直し、会費や会員名簿等、あらゆる面での議論が必要である。と提言されました。

また、今後に向け、会是の一つを同窓生の親睦とし、もう一つを母校や学生、同窓生全体の支援とするなど、より具体的な取組を検討していくことが提案されました。

【シンポジウム】

五名のシンポジストにより、持続可能な同窓会の在り方について、それぞれの立場、視点での意見交流が行われました。

- ※シンポジスト
- ・武田 恒明氏 (札幌市立大学准教授)
 - ・大館 弘和氏 (岩見沢市役所市民連携室)
 - ・白川 典洋氏 (札幌市立米里小学校長)
 - ・鹿島 幸司氏 (千歳市立末広小学校教諭)
 - ・巻 敏弘氏 (青陵会副会長)

① 「青陵会の現状と課題について」

(武田) 教員以外の卒業生は、青陵の組織的な仕組みがわからない。これからそれぞれの立場での活動が求められており、会を「残すために」ではなく、「どのような取組を」のスタンスで、青陵会の存在

意義を考えるべき。

(大館) 公務員部会の同窓に対して、青陵会の「売り」は何かを伝えることが難しい。

教員の方々が学校のことを語り高めていくことと同じように、公務員部会としての活動の意味が求められている。

(白川) 教員部と民間部がどう関わるかが課題。研修会の内容を変えていくことや、同期のつながりを大切にしたい活動が必要。

(鹿島) 人の繋がりが青陵会の良さ。その一方で、中堅や若手の参加率が低いのも心配。学校現場からの声として、入会のメリットが見えにくいことや、入会のハードルが高いことなどが挙げられている。

(巻) 教員としての組織はもう考えられない。様々な職種の同窓が、今後求められる新しい社会の中で、人材の育成ができるような、新しい青陵会の形を模索していくべき。

② 「新しい青陵会の方向性について」

(武田) やりがいや自分の存在意義が見える活動を模索する。異業種の交流を通し、地域の活性化や学校支援など、役に立つ同窓会を作ることが存在意義につながる。

(大館) 研究室や部活単位での交流支援なども、新たなスタートとして

の方策の一つ。

ラインやメールを有効活用して情報の共有を図り、幅広い活動に繋げる。

(白川) 同窓会の広がりが必要。大学が存続する限り同窓会は消えない。会の魅力が引き出せるような活動を推進することが大切。

(鹿島) 同窓生が様々なライフスタイルの中で繋がれたらいい。SNS等を活用しながら、全ての同窓生が青陵会の今の課題を知り、できることから始める。

(巻) 年代別部会など、教育系にこだわらずに活動すべき。現役学生の活動を知る機会や大学への活動支援としても同窓会を生かすことができる。いろいろな職種が集まり、同窓の幅広い活躍を共有すべき。



教員として最初の赴任先は、「旭川盲学校」でした。大学時代、特殊教育は、全く勉強したこともなく、どのような教育が行われているかも分からず、不安な気持ちで着任しました。しかし、盲学校では、全く目の見えない全盲の児童生徒だけではなく、弱視と呼ばれる児童生徒も多くおり、通常の学校とほとんど変わらない授業が行われ、明るく元気に活動していたことで安心しました。さらに、盲学校には、青陵の先輩が勤務し、バレー部の先輩も市内の小学校に勤めており、二人の先輩の存在がとても心強く、公私にわたり支えられたことで、旭川で教員としての第一歩を踏み出すことができたと思っています。

その後、教育行政に転出し、青陵指導主事会の一員に加えてもらい、色々なことを勉強させていただく機会を得ることができ、同窓のありがたさを実感することができました。中でも、特別支援教育への移行に向けた取組に際しては、通常の学校で実践的な事業に取り組むこととなり、同窓の先輩

の協力なしには推進することができませんでした。当時、文部科学省では、事前に「モデル事業」を実施して、その成果を制度に反映させることが取り組まれ、本道でも、三つのモデル地域を設定して推進することにしました。モデル地区の選定に当たっては、市の教育委員会とのつながりが深い指導主事会の先輩を頼って、岩見沢市で実施することができ、北海道においても二年間のモデル事業の成果を基に特別支援教育の本格的な実施が、スムーズに進められるようになったのは、先輩の存在が大きかったことと感謝しています。

先輩を訪ねて
～「青陵会の同窓とのつながり」～
北海道教育大学岩見沢校
保健体育研究室



伊藤 政 勝 氏
(昭和51年卒)

その後、教育行政に転出しましたが、五名の同窓教員と連携を図りながら教員養成や教育実習に関する指導に携われたことは、とても心強く思っています。青陵会の先輩後輩に感謝しています。

令和元年度 学生活動支援事業
大学連携部長 高羅 正次

北海道教育大学青陵会の活動の大きな柱の一つとして、大学連携部では、地域住民への貢献や母校の発展と学生の活動充実のための支援事業を行っています。創意と工夫に満ちた学生の活動を幅広く支援できるように、今年度より四つの専攻以外にも一般申請枠を新設し対応できるようにしました。

今年度は一般枠での申請はなかったことから、各専攻より申請のあった活動計画の概略を紹介させていただきます。

〈芸術・スポーツビジネス専攻〉

活動名「北教大岩見沢校YOSAKOI-OI『迅』の地方演舞及び来年度の本祭」

今年、初めてYOSAKOIソーラン祭りに参加。その成果として市内含めたくさんの方から演舞の依頼をいただきました。来年も本祭に参加し、市民や多くの地方の方に演舞を見ていただき、感動と元気を与えることができるようにがんばります。

〈スポーツ文化専攻〉 活動名「視覚障害児に対するスポーツを通じた余暇支援事業」

週一回程度、視覚障害のある児童に対して、ブラインドサッカーの指導を行います。現在、アセスメント・顔合わせを終え、五回の指導を実施しました。サッカースキルの向上よりも幅広い運動スキルの獲得を目的としています。

〈美術文化専攻〉 活動名「修了・卒業制作展」

岩見沢と札幌で開催します。例年、地域の方々をはじめ、岩見沢校を指す学生にもご来場いただき、幅広い美術活動や学生の姿勢を見ていただくことで、美術の面白さや楽しさ、可能性を知って感じていただく貴重な機会したいと思います。

〈音楽文化専攻〉 活動名「定期演奏会」

音楽文化専攻の学生・教授陣が丸となって取り組みます。企画運営は実行委員の学生中心に全て学生によって行います。専攻の全学生から演奏曲目を集め、アンケートを取り、選考した曲を演奏します。今年度は、ピアノとチューバの協奏曲を演奏することが決定しました。

若いアイデアと創意工夫で学生の活動をより充実させていってもらうためにも、今後も支援していく体制をしっかりと整えていきたいと思っています。



「嬉しいパイオニアの一期生」
芸術・スポーツビジネス専攻
准教授 角 美弥子

芸術・スポーツビジネス専攻は二〇一四年にできた新しい専攻で、今年の三月によく二期生が卒業したばかりです。芸術やスポーツが好きで、将来、芸術やスポーツに地域であれ、ビジネスであれ、様々な形で関わろうとする人材を育てています。芸術系とスポーツ系のマネジメントを同時に学べる専攻は日本でも岩見沢校だけと聞いています。

その第一期生の一人として入学したのが松本さんでした。受験当時は兵庫県在住で、随分と遠いところからの受験生もあるのだなど、その熱意と情報収集力に感心したものです。

学生も一期生なら教員も初年度、しかも私は人生初の学部生担当ということで、その初々しさ、若々しさに戸惑いつつ、学生たちと二人三脚で専攻を形作りました。学生にとつては面倒ごと慣れないこともあったでしょうが、流石にできたばかりの専攻に入ってくるつわものども、右往左往しながらもしっかり鍛えられて卒業していく様子は頼もしくさえありました。

一期生は四年生になってから研究室が本決まりとなったため、ゼミ生と指導教員としての松本さんとの関わりは一年だけでしたが、松本さんは三年生の演習時から積極的に授業にもプロジェクトにも参加し、リーダーシップをとってくれ、のんきな

教員は大変助けられました。卒論では北海道のサイクリングツーリズムを研究していた松本さんにかこつけて、研究室を上げてオホーツクまで調査に行ったのも楽しい思い出です。課外活動でもハンドボール部のマネジャーとしても手腕を発揮し、その先輩の薫陶を受けてか、地域文化政策研究室にはその後も毎年ハンドボール部に関わる学生が在籍しています。

卒業してからも、折に触れ近況を知らせてくれたり、卒業生で飲みに行ったりと、今度は社会人としての付き合いが些少なながら続いているのも面白いことだと思っています。希望の企業に入社し、大学とは違うビジネスの世界で荒波にもまれていると聞いていますが、自らの意思で動くことができる松本さんですから、なんだかんだといながら結局自分の望む方向へと舵をとっていくものと思っています。今後の旅路に幸あれと祈っています。

恩師と学生のこの頃



「感謝」
北海道ガス株式会社
松本 茉奈

私が大学を卒業してから二年という月日が過ぎ去りました。社会人二年目となった今、新入社員だった頃の研修の日々よりも一層働きたいと、いかに大変なことかを実感する日々です。また、後輩もでき、教える立場として、責任のある行動を取らなければならぬと気が引き締まる思いで、日々を送っています。

野球を観ることが好きだった私にとって、岩見沢校の「芸術・スポーツビジネス専攻」は、大変魅力的でした。観戦スポーツの普及やスポーツの経済学・経営学を学んでみたいという思いで、岩見沢校への入学を決意しました。

二〇一四年に新設された芸術・スポーツビジネス専攻の一期生となった私にとって、四年間の大学生生活は毎日がとても新鮮でした。創設一年目の専攻ということで、学生の私たちにとつても、専攻の先生方にとつても、全てが初めての取り組みでした。授業の内容として、座学よりもイベントの企画・運営をしたり、自分たちの取り組みをプレゼンテーションで発表したり、学生が主体となる授業が多かったです。時折、壁にぶつかることもありましたが、その度に同期や先生方に支えられ、乗り越えることができました。様々な授業を通して、観光とスポーツを掛け合わせた「スポーツツーリズム」というものに興味が湧きました。そんな私にいつも力を貸してくれたのが角先生でした。私の研究の調査のために、オホーツクへの研究旅行を計画してくださりました。私にとつても、とても楽しい思い出です。

角先生には、研究だけではなく、部活の事やプライベートな事まで様々な事で相談に乗って頂き、多くのアドバイスをして頂きました。お忙しい中、私を支えてくれたことに感謝の念しかありません。

大学での四年間を通して、そして、自分の研究を通して、何事も人の心を動かすことが大切であると感じました。そんな思いから、営業職という道を選びました。人々に何を一番に伝えるのか、人々が何を必要としているのか、その為には自分が何をしたら良いのかを考える事は、スポーツであっても、観光であっても、営業であっても、重要であると考えます。

感謝の気持ちを忘れずに日々精進して参りたいと思います。

新青陵会員の抱負



「繋がり」を大切に

長沼町教育委員会
福原 雛子

大学を卒業し、四月に長沼町役場に就職し、五か月近くが経ちました。仕事や役場の雰囲気にも慣れて楽しく仕事をさせていたでいています。

私は現在、教育委員会の学校教育課に所属しており、町立の小学校や中学校の運営事務の仕事をしています。例えば、児童生徒・先生方の健康診断の手配、学校の備品の購入、遠距離から通学している子どもたちや経済的な理由で就学が困難な子どもたちに補助金を出したり、様々な仕事があります。直接子どもたちに係わることは少ないですが、子どもたちが楽しく健康で安全に学校生活を送れるように管理するこの仕事はとても重要な仕事であると思います。また、私の仕事は黙々とパソコンに向かい、作業をすることが多く、子どもたちだけでなく、他の課の職員の方や町民の方々、先生方とも深く関わることはありません。しかし、そういう仕事だからこそ、「人と人との繋がり」が大切だと実感しています。四月のまだ右も左も

わからない頃、私が教育大学出身ということ、たくさんの方々に話しかけていただきました。

何気ない会話でしたが、緊張していた私にとっては、少し気持ちが軽くなり仕事がしやすくなった気がしました。また、私がミスをしたときに上司や先輩方に助けていただいたり、町民の方々に様々な会話を通しているいろいろな知識を教えてくださいました。

机に向かうばかりの仕事ですが、何気ない会話や人々との繋がりが仕事だけでなく人生において重要なことであると感じました。パソコンに向かっていただけではわからない知識や経験は人々との繋がりによって生み出されるものだと、この五月間で実感しました。

よく公務員は、「デスクワークばかりでつまらない」「安定志向」という風に思われる傾向がありますが、どの仕事も直接・間接の違いはありますが、人と仕事をしているのだと私は思っています。

青陵会会員になった今、様々な経験や知識を持った先輩方に関わらせていただきながら、たくさんの方を学ばせていただき、この青陵会の繋がりを広げて行けたらいいと思っています。

これからよろしく願います。



「思い出を糧に」

夕張市立夕張中学校
教諭 福井 智也

私は今年の三月に北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科美術文化専攻を卒業しました。そして四月から北海道の中学校美術科教員として採用され、夕張市立夕張中学校に勤務しています。

私はオホーツクの紋別市の出身です。幼い頃から絵を描くことやものづくりが好きで、図工や美術の授業が何より好きな子どもでした。高校生の時に、自分の特技を生かせる職業に就きたいと考えるようになりました。美術分野の職業はどの業種も狭き門で、本当にこの道に進むべきか迷いましたが、中学生の頃に出会った美術の先生への憧れもあり、美術科教師を目指して北海道教育大学岩見沢校を受験し、運よく合格することができました。

大学時代は、学校祭や美術作品展の企画運営に力を注ぎました。特に四年生の時に携わった「修了・卒業制作展」の運営では、学生生活最後の一年に大変貴重な経験をすることができました。同じ学年の学生同士で力を合わせて一つの行事を運営する難しさ、助け合える仲間の大切さ、

支援して下さる周りの方々のあり難さを強く実感することができ、素晴らしい思い出を作って卒業することができました。

また、この活動に対して青陵会の先輩方から「学生支援基金」のご支援をいただき、役立たせていただきました。私も岩教を卒業して青陵会会員となり、今度は後輩を支えていく立場なのだ実感しています。

さて、四月から夕張中学校での勤務が始まり四か月ほどが経ちました。まだまだ分からない事、うまくいかない事ばかりですが、元気な生徒たちと温かい先生方に支えていただきながら、充実した日々を過ごしています。部活動は野球部の顧問をしています。野球は初心者ですが、生徒と過ごす時間はとても楽しく、生徒と共に自分自身も成長していく良いチャンスだと強く感じています。

今後の目標は一日でも早く一人前の教師になることです。まだゴールの遠い目標ですが、大学時代の思い出を糧に、自分にできることから全力で取り組んでいきます。

支部だより



「今こそ会員の結束を」
胆振支部 支部長
大 年 智 二
（苫小牧市立苫小牧西小学校）

胆振支部は、北海道の西部、太平洋に面し、西の端から東の端まで直線距離にして約一五〇kmという東西に長い地域です。この胆振四市七町の小中学校一一五校に約一五〇名の会員がいます。

支部の活動状況に入る前に、昨年の九月六日に厚真町を震源とするマグニチュード六・七、最大震度七の胆振東部地震がありました。

この地震により、多くの尊い人命が失われ、ライフラインの寸断や家屋の倒壊など、甚大な被害を受けました。まもなく、一年が経とうとしています。未だに仮設住宅での生活を余儀なくされている地域住民の方々がいたり、校舎が被災し使用できなくなったため仮設校舎で授業を行っている学校があったりと、完全な復旧・復興まではもうしばらく時間がかかりそうです。地震発生から今日まで、全道の青陵会会員の皆様方をはじめとする多くの方々から様々な支援や心温まる励ましの言葉など

をいただきました。改めて紙面を借りて感謝申し上げます。

しかし胆振はこのような暗い話題だけではありません。二〇二〇年四月二十四日に白老町のポロト湖畔に北日本エリアでは初の国立博物館としてアイヌ民族博物館や民族共生公園などの施設からなる民族共生象徴空間（愛称：ウポポイ）がオープン予定となっております。

今、アイヌ文化発信の拠点となる様々な施設の建設が急ピッチで進められています。



さて、本題の胆振支部の活動状況ですが、会員の資質向上を目指した研修の推進については「研修部」が、会員同士の懇親や親睦に関することは「厚生部」が、そして、支部の組織強化や発展に関するものは「組織・広報部」が担当しています。

研修部では、六月と七月に職能研修と論文演習、十月に面接練習を行っています。六月と七月の研修では、校長採用や教頭昇任試験の受験予定者が道青陵研修部より示された例題に基づいて作成した論文を持ち寄り、校長を交えながら、様々な意見を出し合い論文のブラッシュアップを図っています。

特に、七月の研修には道青陵より井村信校長を講師に招いて指導を仰ぐなど、より深まりのある研修になっていきます。



また、厚生部では、五月に懇親会、一月末に退職激励会を行っています。どちらの会にもOBの方々も参加し、また、勇退激励会には日高支部の役員の方々にも案内を出すなど、現職だけではなくOBや他支部の同窓との貴重な交流・親睦の場となっております。

さらに、組織・広報部では、五月に会員名簿作成への協力、二月に広報紙「青陵いぶり」を作成しています。広報紙については全会員に送付し、同窓意識の高揚を図っています。

このように、胆振支部では管理職を中心に様々な活動に取り組んでいますが、会員数の減少とともに同窓意識の希薄化が課題となっております。また、校長の大量退職期を迎え、後継者の育成も急がれるところです。このような状況の中ですが、今後胆振支部の活動に多くの会員の参加を積極的に呼びかけながらさらなる結束を図っていききたいと思えます。

編集後記

会報一〇四号をお届けします。本号の発刊にあたり、ご多用の中玉稿をお送りくださった皆様に心よりお礼を申し上げます。

年、二回の発行ですが、同窓会の情報や卒業生の近況報告、先輩からの学生時代の逸話などお伝えしていきます。記事内容をどうするか。これがわたしたち、広報情報発信部の頭の痛いところなのです。

記事がマンネリにならないように少しずつ内容を変えてみたり、原稿の依頼先をどこにしようかと侃々諤々と検討したりしながら、ない知恵を絞り編集を進めているところです。

これからは、教育界ばかりでなく、民間などで活躍する卒業生についてもどんどんこの紙面に紹介していきたいと考えています。

会報に是非載せてほしいという情報を待っています。よろしくお願いたします。

《広報・情報発信担当》

- 部長 松田 一直（美・中央小）
- 副部長 江 幡 佳 代（三・岡山小）
- 部 員 一ノ瀬 健太郎（赤 平 中）
- 小野寺 英 樹（美・峰延小）
- 沢 泰 宏（岩・第一小）